



JAPANESE A1 – STANDARD LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1

Tuesday 18 November 2008 (afternoon)
Mardi 18 novembre 2008 (après-midi)
Martes 18 de noviembre de 2008 (tarde)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only. It is not compulsory for you to respond directly to the guiding questions provided. However, you may use them if you wish.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages. Le commentaire ne doit pas nécessairement répondre aux questions d'orientation fournies. Vous pouvez toutefois les utiliser si vous le désirez.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento. No es obligatorio responder directamente a las preguntas que se ofrecen a modo de guía. Sin embargo, puede usarlas si lo desea.

次の 1 (a) の文章と 1 (b) の詩のうち、どちらか一つを選んでコメントリー(解説文)を書きなさい。

1 (a)

まつさきに現われたのは黄色である。

黄色の次に柿色が、その次に茶色が一定のへだたりをおいて続く。

堤防の上に五つの点がならんだ。

堤防の田圃のあぜに私の目と同じ高さである。点は羽をひろげた蝶のかたち似ている。河口から朝の満ち潮

5 5 につてさかのぼってくる漁船の帆が、その上半分を堤防のへりにのぞかせているのである。

ゆつくりとすべるように動く。朝は風が凩ないであり、さもなければ西の逆風が吹く。けさはいつになく東の風である。帆を張るのはめずらしいことだ。

10 10 河岸に群れつどうた漁師の身内どもが見える。先頭の船が帆柱にかかげた大漁旗をみとめてどよめいていることだろう。今しがた私が遠眼鏡でたしかめたものである。船付場に女子が近づくのはかたくいましめられている。去年までは私が船溜りへおいて魚の水揚げを見物していても母上はだまっておられた。しかし、去年の暮れ、嘉永の御代が安政となりかわつてからは、母上は何かにつけて口やかましく女子の心得を説かれる。十五歳といえば、男子なら元服をする年齢である。いつまでも志津は子供のつもりであつてはならぬと申される。

先頭の船が帆をまきあげた。船溜りはすぐである。二番目の船も帆をたたみかけている。 [中略]

15 15 私は吉爺といつしよに家へもどつた。

例によつて母上は私が定められた時刻に帰宅しなかつたことを責められた。河岸見物に出かけたと思つておられる。雄斎伯父の姿が見えない。きよう私たちとともに本明川上流へ向かうことになっている。先程伯父のこもの小者伊兵衛がやつて来て五反屋敷の辻で落ち合おうと告げたという。

20 20 私は山歩きにそなえて野袴をつけた。この日のために自分で縫つたものである。母上は袴の緒を結ぶのに手をかしながら、女だてらに野袴をはくとはなげかわしいという意味の愚痴をこぼされた。父上にはきこえない。耳が遠いからである。石火矢の調練がたびかさなるうちに耳をいためてしまわれた。よほど大声で叫ばないかぎり母上の声はつうじなくなつていいる。どうしたかげんか私の声はきこえるのである。それゆえ 来客と対応するさい、私はなくてはかなわぬ者となつていいる。ききとりにくい客の言葉を私が父上にくり返し伝えるのである。男同士の席に婦女子が同席することを、母上はすいぶん気にやまれた。父上の求めてされることであるとしても客に対して不作法ではないかという。しかし、私が居なければ父上は相手のいうことの半分しかおわかりにならない。世間話ならともかく御役所のこと、御役のこと、かりそめにも一藩の指南であればわきまえていなければならぬことも多々あるのだ。

25 25 測り縄と六尺杖を持つて吉爺がさきに立つた。父上も縄をまいて持たれた。

30 30 私は遠眼鏡を袋に入れて肩にかけた。初夏の日ざしは目にまぶしい。笠をかぶつていてよかつたと思う。初めはかぶるつもりではなかつた草木の生いけつた山へのぼるのに笠などつけては身動きにも不便と思われたからである。それに私は生まれつき不器用で、笠の緒をいちいちしめ直すのが苦手だ。母上からたつての仰せで笠をつけた。この年齢になれば、侍の娘が大道で顔をさらすものではないといわれる。

このとしになればとか、十五歳といえはもう誰も子供あつかいしないとか、くり返しいわれるけれども、私にしてみれば自分が今年になってにわかには大人びたとはどうしても思えない。身も心も十四歳のままである。私はそう信じている。

35

しかし、単衣の襟もとからしのびこんで肌をくすぐる風、袖口から這入ってわきの下や胸をなでる風の快さは今年のものだ。路ばたに木洩れ陽をふりまいている樟の葉むれのなんというみずみずしい青さ。去年も同じ風に吹かれ、同じ樟の若葉を見たのに、あたかも初めて目にするものようである。

何を見てもこのころは気が弾む。きらきらと輝く路上の砂にたつたいま水が撒かれ、黒と白の縞模様を織り出している。川面はいちめんにはさま波立ち、玻璃のような光を放つ。ありふれたものを見ているのに、この世のものは思えない美しさをおぼえて、ゆえもなく私は胸をときめかす。

野呂邦暢（『諫早菖蒲日記』 一九七七年）

(注) 諫早 佐賀県の諫早市の城下町。安政(江戸末期)の頃、人口九万人くらい。

遠眼鏡 望遠鏡。双眼鏡。

吉爺 語り手の家の使用人。

藩の指南 藩(大名の領地)の指導者のこと。語り手の父は、大砲の使い方の指導者。

設問

- 1 この作品はどのような人物によって語られ、作品の中でどのような役割を担っていますか。
- 1 この文はこの歴史小説の冒頭部分にあたりますが、明治になる前の幕末という時代の空気はどのようなものであったと想像できますか。
- 1 語り手を取りまく風景の描写にはどのような特徴があり、それは作品にどのような効果をもたらしていますか。

1 (b)

雪

雪のふる下に波がうっている。
ながいながい渚なぎさに大きな波がうっている。
漁船が雪に埋もれている。
小さい川があつてそこだけ雪がくずれ
5 人がいるかどらたがわれる粗末せまつな小屋がある。
同じような景色が来てはまた過ぎる。
噴火灣はくはくは漠々として水平線が見えず
さむい藍黒の海いちめに雪がふっている。
汽車は速力をあげてすすみ
10 雪ふりながら
海が夜になろうとしている。
ひた走る汽車の
二重張りの硝子戸ゴラスに顔をおしつけてみると
空いつばいに雪も海も暮れてゆく。
15 全速力の汽車も
はしりながらいつしよに暗くなつてゆく。
抵抗できぬこの大きな速度のなかに
私はただ叫び声をあげたくなつた。
その叫びたいこえをこらえ
20 夜になるのを見つめていた。

秋山 清 (「雪」、詩集『白い花』一九四二年)

設問

- ー ひた走る汽車の窓から見える景色は、どのように描かれていますか。
- ー ガラス戸に顔を押し付けている「私」は、なぜ叫び声をあげたくなり、また、それをこらえたのですか。
- ー この詩が書かれたのは昭和一六年(一九四一年)で、第二次世界大戦が開始された年ですが、その時代のどのような空気が感じられますか。
- ー この詩はどのような構成になっていますか。それによつて、どのような効果が生じていると思いますか。